

研究分野のキーワード：ボルネオ島，動物分類学，オタマジャクシ，流水環境，生物多様性

研究紹介

東南アジアのボルネオ島という島は多様な生物の宝庫であり、この島で独自の進化を遂げた生物も少なくありません。そうした生物の1つにオタマジャクシの時期を溪流で過ごすカエル類があります。こうした流水環境に暮らすオタマジャクシの一部では、顎が大型化したり（左図）、腹面に吸盤を持つなどの形質がいくつかの系統で独立に進化し（右図）、強い流れの中で岩に張り付いて生活することが可能になっています。



コオロギヒキガエル属の幼生の腹面



ボルネオハヤセガエル属の幼生の腹面

こうしたカエルたちの中で特に種分化の著しいものが、オタマジャクシの腹面に強力な吸盤を持つ、ボルネオハヤセガエル属 (*Meristogenys*) と呼ばれる仲間です。この仲間のカエルはボルネオ島全域にごく普通に分布していますが、種のレベルの分類は大変な混乱状態にありました。その1つの原因は、この属では多くの種類がオタマジャクシの形態では明瞭に区別できるのに、カエルになると皆似通った姿形になってしまうことにあります。

私はボルネオ島の各地からこの仲間のカエルとオタマジャクシを採集し、遺伝情報を元にオタマジャクシと親の対応づけを進めるとともに、遺伝的なグルーピングと様々な形態形質の関係を徹底的に調べ、混乱していた分類を整理し、いくつかの新種を記載しました。その結果、1つの種だと思われていたものが、山域ごとに別の系統から進化した別種を含むことがわかったり、溪流の源流部に棲んでいる集団と中流部に棲んでいる集団が、やはり進化的には全く別系統の別種であることがわかったりと、この仲間のカエルがきわめて複雑な種分化の歴史をたどってきたことがわかってきました。今後も、このような未知の生物多様性を丹念に記述してゆくことで、急速に破壊が進む熱帯地域の生物多様性の価値を明らかにしていきたいと考えています。



ボルネオハヤセガエル属の成体